The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	和紙から考察する平安朝の美意識
Author(s)	森, 弥生
Citation	デザイン理論. 2006, 49, p. 74-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53117
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

和紙から考察する平安朝の美意識

森　弥生／大阪大学大学院博士後期課程

私達日本人が使っている文字，その根本は「漢字」である。大和朝廷に重用され，中国への外交文書を漢字で書いていた帰化人が日本語を漢字で書く方法を発見し，最初は純粋な漢文方式だけで綴られた正規の記録の中に，日本語を混入していったとみられている。

はじめ帰化人が発見した漢字による日本語の表記方法が，日本人の漢字使用と共に急激な成長を遂げ，奈良時代には学僧によって漢字を借りて日本語を書き表す一字一音表記の方法が発生し，平安時代になると百年ほどは「万葉仮名」が社会的に広くもちいられた。

並行して「万葉仮名」は徐々に簡略化され「草仮名」へと発達した。それが紀貫之・小野道風・藤原佐理・藤原行成などの能書家が書くことによって洗練されていき，日本独特の「仮名」が発達した。

「仮名」の発達の最も大きな要因は，894年の「遣唐使の廃止」であるとされている。それまで「漢詩文」が主流で公の場所では漢字が使われていたのが鎖国状態になり，「古今和歌集」等の勅撰和歌集の編纂で盛んになった「和歌」を書くために「仮名」が用いられ発達していったのだと考えられる。

「和歌」が盛んになると「和歌」を「仮名」で書くために豪華な「料紙」が作られるようになった。「仮名」と同様に中国から伝わった製紙法から様々な加工を施した我が国独特の「料紙」が発達した。平安朝が生み出した「仮名」という優雅な文字，使用された「料紙」などからその美意識について考察する。

料紙について

料紙については様々な定義がされているが，それらの定義から推測すると，書や絵を書くために使用する楮・三椏等を漉いて造られた紙を総称して料紙というようである。特に書道に使われる用紙，中でも仮名書道の用紙は，いろいろに着色したり，文様をつけたり，金銀を鏤めるなどした優美華麗なものが平安時代を頂点に昔から好んで使用されてきた。そのようにして加工された美しい用紙は，当時の平安貴族の書である仮名書道の表現にぴったりと合い，その後の仮名書道発展のための原動力の一つとなった。このようなことから料紙とは，狭義には特にこのような仮名書道に使われる装飾・加工された紙をさしていうようになったのである。

紙は中国で後漢の蔡倫によって発明されたというのが『後漢書』の蔡倫伝によって定説とされていた。しかし近年，蔡倫以前の前漢の紙が数多く出土し，これらの発見から紙の起源が蔡倫より200余年さかのぼることが判ってきた。紙には様々な用途があるが，その紙を皇帝の命により書写のために発展させたのが蔡倫である。日本で製紙が行われるようになった時期は『日本書紀』の推古天皇18年（610年）僧曇徴が「紙」と「墨」を伝えたという記述により，これが日本での製紙の始まりであると考えられていたが，儒教に引き続き仏教の伝来・普及により写経用紙として，また朝廷の直轄領である屯倉を運営するための台帳に紙が使用されている等から考察すると，おそらく日本ではそれ以前から製紙が行われていたと想像される。日本での造紙の原

料は『延喜式』の巻13図書寮「造紙」の項に布・穀皮・麻・斐皮・苦参の五種類があげられているが，実際によく使用されたのは麻・楮・雁皮・三椏である。

漉いただけの紙，何の加工もしていない紙ことを生紙といい，この生紙に様々な技法を施して美しく加工した紙を料紙という。料紙は平安時代，仮名料紙・写経料紙として発展したが平安時代末期から急速に衰退し，当時の装飾の技法には現在も解明されていないものがある。料紙の種類と装飾方法には①どうさ引き，②染め紙，③箔加工，④雲母ブリ，⑤から紙，⑥下絵装飾紙，⑦墨流し，⑧継ぎ紙，⑨仕上げ等がある。

料紙の種類・装飾法ごとに，実際に奈良・平安時代の遺品に使用されている紙をいくつか例にして分類すると　Ⅰ．染め紙　①浸け染め（桂本万葉集・関戸本古今集・継色紙）②漉き染め（藍紙本万葉集・関戸本古今集）③雲紙（蓬莱切・雲紙本和漢朗詠集・雲紙和漢朗詠集切）④飛雲紙（名家家集・元暦校本万葉集）⑤羅文紙（石山切伊勢集・筋切・通切）⑥ぼかし染め（本願寺本三十六人歌集．躬恒集・本願寺本三十六人歌集．重之集），Ⅱ．箔加工　①装飾経（久能寺経・平家納経）②大和絵（源氏物語絵巻），Ⅲ．雲母ブリ（高野切・升色紙），Ⅳ．から紙　①唐紙（本阿弥切・粘葉本和漢朗詠集・元永本古今集）②中国製の蠟箋……等がある。

平安朝の古典文学に見られる「料紙」

平安時代の貴族が「料紙」及び「紙」をどのように使っていたのか，貴族の生活の様々な場面でどのように扱われていたのか。平安貴族の「紙」に対する当時の価値観等を考察する方法として，平安朝の代表的な古典文学から「紙」の出てくる場面を抜き出してみたところ『宇津保物語』47，『蜻蛉日記』16，『和泉式部集』12，『紫式部日記』12，『枕草子』50，『源氏物語』106の「紙」の場面があった。よく使われているのは，「陸奥紙」「色紙」「畳紙」「薄様」「懐紙」「唐の紙」「紙屋紙」である。そこで七種類の紙それぞれが六つの古典文学の中に出てきた数，使用場面・用途等から平安貴族の紙に対する価値観や意識等について考察した。

平安時代，紙は高価で貴重なものであったが，なかでも消息や和歌を書く料紙は貴族にとってなくてはならないものであった。特に「薄様」や「色紙」の使い方に平安朝の貴族の美意識を窺うことができる。「薄様」を二枚重ねて微妙な色を楽しむ色彩感覚は，女性の衣装の襲の色目と共通するところがあり，「色紙」と「折枝」の組み合わせにもまた送り手受け手の双方に高い教養や趣味の良さ等，感性の豊かさが要求された。

「仮名」「料紙」から見た美意識の変遷

「和歌」「仮名」「料紙」は，互いに相乗効果を生み出した。「和歌」「仮名」は貴族の子弟の大切な教養になり，「料紙」も同様に発展した。「仮名」も時代と共に変化していった。三蹟の時代である摂関時代「仮名」は洗練され，貴族が最も栄えた平穏な時代を反映し，字形を整えながらゆっくり書く，素直で優雅な書風であった。院政時代になると貴族の繁栄は続いていたが不安動揺の絶えない時代であった。「仮名」の書も，その時代を反映するかのように自由に速く書くようになり，字形を整えて書くよりも変化を好み，散らし書きが流行した。「仮名」の書，「料紙」ともに上り詰めた絶頂の時であり，爛熟期であったのだと考えられる。平安朝の美意識もまた，摂関時代の「素直で優雅」なものから院政時代の「変化に富み，技巧を凝らした」ものへと変遷を経たのではないだろうか。